女性会連盟100周年に向けて

日本福音ルーテル教会女性会連盟は2028年に100周年を迎えます。そこで、女性会連盟26期役員会では、これまで日本のキリスト教宣教の為に尽くして下さった宣教師の方々を５回にわたって紹介するシリーズを展開しています。３回目は岐阜県「あゆみの家」をはじめとする障がいのある方と共に生きる「場」をつくり、共に生きて下さったジョン・ボーマン先生とご伴侶ベルニダさんを紹介します。

わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、
わたしにしてくれたことなのである　　マタイ福音書 25:40

ジョン・ボーマン宣教師（以下ボーマン先生）は1924年、アメリカ合衆国のカンザス州グッドランドで生まれました。1945年、アメリカ軍の兵士として日本の地を踏み、焦土と化した各地で食べ物がなくて苦しむ人たちを目の当たりにして心を痛めました。子供たちに食糧の支援などを続け、帰米の時に「もう一度日本に戻ってきてください」という一人の子供の声に動かされ、宣教師となる決意をされたのです。

■

1950年にベルニダさんと結婚。1953年に再来日後は神奈川県の湯河原町を中心に伝道をされ、その間、東京の山谷の子供たちのキャンプを開いたりして親のない子供たちを励まし続けられました。岐阜県大垣市の地に教会を、と祈り続けた教会員の祈りが聴かれ、ボーマン先生ご夫妻の赴任と共に大垣ルーテル教会ができたのは1965年のことでした。

■

「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ25：40）イエス様のこの御言葉に動かされ、ボーマン先生を中心とした教会員の祈りは1971年、通園施設あゆみの家（無認可）として不破郡垂井町にその姿を現しました。土地は教会員である名和氏より提供され、建物はボーマン先生が地元の銀行などの協力により用意されました。資金もない外国人に多くの建設資金を融資して下さった地元銀行の頭取さんのことを、ボーマン先生は後年、よく語っておられました。同年４月３日の開所日には、障がいのある３人の子供たちが隣町の関ケ原町から通い始めました。

その頃、この西濃地方には、障がいのある人たちの施設はありませんでしたから、生活の困難を抱える子供たちだけ

初代あゆみの家

でなく、大人（の障がい者）や障がいの種別を超えた相談がありました。そしてこの方々の願いに応えたいと、働く場や生活の場が生まれました。それがパウロセンターやルターホームです。これらはいずれもボーマン先生が東京で譲り受けた廃屋資材を再利用して建てられたものです。廃屋資材は、ボーマン先生が自らトラックを運転し、東名高速道路を何度も往復して運搬されたものです。パウロセンターは鶉（うずら）玉子の加工作業など仕事の場として、またルターホームは障がいのある人、身寄りのない人など数名の人たちが暮らす生活の場として利用されるようになりました。

重い障がいがあって学校にも行けなかった子供たち、身体に障がいのある人たち、知的なハンディのある人たち、心の病のある人たちなどが集まるようになりました。そして「あゆみの家」誕生後の数

年間は、生活上の困難を抱える実にさまざまな人たちに利用されるようになりました。ボーマン先生はこれらの願いに応えようと、設備の整備やその資金作りのために、街頭募金、献金の呼びかけ、英語講師などをしながら奔走されました。

やがて利用者とスタッフが増える中で、資金的な運営上の困難も大きくなり、幾度となく協議と祈りが重ねられ、社会福祉法人への途が選ばれました。さらに、地元の町や岐阜県などの行政、報道関係や議会の方々の応援があり、1978年10月に国の認可が得られ社会福祉法人あゆみの家として設置され、現在デイセンター、入所施設、通所施設、グループホームなどの施設が運営されています。

■

妻のベルニダさんは、夫の活動を支えたいと考え、あゆみの家のバザーでクッキーやケーキを販売しました。また教会員と共に1988年リサイクルショップを開き、売り上げをあゆみの家に寄付し続けました。それは2011年９月に閉店するまで続けられました。

2004年３月22日、ボーマン先生が天に召されました。79歳でした。宣教師として再来日されて51年。あゆみの家の働きが始まって33年、常に祈り、困難を抱える人たちと共に歩み続けられたボーマン先生の慈愛のまなざし、それを支えたベルニダさんのお働きは、あゆみの家に関わる一人ひとりの心に刻まれています。

日本福音ルーテル大垣教会（旧会堂）

現在のあゆみの家

ボーマン先生の車

引用・抜粋『あゆみの家の 40 年　祈りの応えⅡ』